

## フィンランド・ネウボラに見る子どもの虐待・貧困の予防

### ～予防の意義と援助方法に焦点をあてて～

田園調布学園大学 太田由加里

#### 1. 問題の所在

日本では子どもの貧困率の高さが社会問題となり、地域では子ども食堂が開設、虐待やいじめのニュースが日々報道されるなど、児童福祉法が謳うすべての子どもの命が保障されているとは言い難い。一方、フィンランドは子どもの貧困率が低く、低出生体重児出生率の短期間の改善も見られ、子どもの幸福度も高い。独自の援助方法で子どもの支援を行っているネウボラに着目し、改めて子どもの福祉の視点からその活動を見直したい。

#### 2. 目的

日本では各自治体で子育て支援のさらなる充実をめざし子育て世代包括支援センターを立ち上げた。それらはフィンランド・ネウボラを理想に日本版ネウボラとして活動を始めた地域も多い。では実際のネウボラではどのような理念と援助方法で子どもの命を守るべく機能しているのか。ネウボラでの参与観察を通してその特徴や利点を明らかにすることで、日本の子どもの虐待や貧困の予防に寄与したい。

#### 3. 方法

ネウボラを対象とした聴き取り調査及び参与観察、資料収集、関連機関への聴き取り調査。

#### 4. 調査の概要

調査地域：フィンランド・ハメーンリンナ市（ヘルシンキから 100km 北の地域、人口 6 万人強）

調査時期：2016 年 10 月～12 月、

調査方法：ネウボラ（保育園・小学校及び就学前教育・医療機関併設、市役所など）への聴き取り調査と参与観察。

#### 5. 結果

- ①ネウボラでの面談は予約制、面談時間は約 1 時間。保健師は子どもが遊ぶスペースのある部屋で子どもと家族の健診と相談を行う。個別化が重視されている。
- ②ネウボラでは同じ保健師が数年にわたり相談に応じる。支援の継続性とラポール形成に援助の特徴がある。午後 12 時半から 1 時間は電話相談で、予約外でも、専門職に双方向の立場で相談可能なシステムが確立されている。
- ③ネウボラ独自の Facebook を活用し、地域住民と医療、保健、福祉に関する情報を共有、Facebook を通しての情報交換も可能である。多様なツールで援助方法が柔軟である。
- ④医療・保健・福祉の重要概念は予防であり、乳幼児期の無料で手厚い対応は健康な国民を育てるのに必須。生活リスクの早期把握は早期対応に繋がるという徹底した予防優先。
- ⑤ネウボラと小学校・保育園・医療機関などの併設で教育・保育・医療との連携が可能な点が子どもの虐待や貧困の予防に効果的である。記録ツールに工夫がされ、専門職の情報共有と簡素化が実現している。記録の保存は 50 年におよんでいる。
- ⑥移民家族の支援など新たなニーズに対応する多様性に配慮した援助方法の開発等。